

ホルツバータル著

『哈騰根十三家神祭祀』 qatagin arban

Yurban atar-a tegri-yin tayily-a

利光有紀

モンゴル文(縦文字) A5版、一九八頁からなる本著は、オル

ドスのハタギン姓をもつ一族(現在では、過去のような氏族制度が存在するわけではないので、氏族とせず、「ハタギン一族」と以下記す。)が、一九六〇年代まで継承してきた「ハーン家の十三アタガテングリ祭祀」に関するモノグラフである。ハタギン一族とは、いうまでもなく、チンギスハンの一一代前の祖先にあたるボドンチャルの兄ハタギの末裔であり、『元朝秘史』では「合塔斤」あるいは「合答斤」などと記された氏族である。またアタガテングリとは、一般に家神と訳されているように、祖先祭祀に関する神あるいは天とみなされている。著者の主張にしたがえば、この祭祀は本来、ハーン家すなわちボドンチャルの末裔であるボルジギン一族に固有のものであるという。したがって本著は、ハタギン一族によって継承されてきた、ボルジギン一族の祖先祭祀に関するモノグラフである、と要約することができる。換言すれば、チンギスハンをかのぼる傍系によって伝えられてきた、チンギスハン直系の祖先祭祀が叙述されているのである。

評

書

ちなみに、本著の漢訳名は『哈騰根十三家神祭祀』とされている。このままでは「ハタギン氏族十三家の、神の祭祀」と誤解されやすい。本著は、その漢訳が予定されており、その際には『哈塔斤十三阿塔天祭祀』として出版されるであろうとのことである。本著の最大の特徴は、フィールドワークをもとにしてデータが集められているという点であろう。ハタギン一族の人々が現在集中しているウーシン旗を中心に、オルドス地方一帯で六年間にわたって行われた聞き取り調査によってはじめて、かれらの間に受け継がれてきた祭祀の具体的諸相が明らかにされた。

従来のモンゴル文化史とりわけ宗教的側面に関する研究では、もっぱら仏教伝来およびその普及について論究されてきた。もちろん、それ以前についても多くの関心がよせられてはきたが、『元朝秘史』やいくつかの旅行記などに資料が限定されるために、仏教以前のモンゴルの宗教を具体的に理解することはかなり難しい。資料の限界という、方法論上の大きなゆきづまりが存在している。本著は、まず何よりもハタギン一族の祖先信仰とその儀礼について正確な内容を与えてくれる。そして、そのことによって、詳細不明とされてきた古代モンゴル人の宗教形態あるいはモンゴルのシャマニズムについての理解を促すものである。と同時に、こうしたテーマに関する研究における、方法論上のゆきづまりに対しても一石を投ずるものである。

ところで、チンギスハンの一族にまつわる祖先神崇拜としては、チンギスハンそのものを神格化した祖先祭祀について、すでに『成吉思汗祭典』(蒙文) : *altan ordon-u tayily-a*、が一九八三年民族出版社(北京)から刊行されている。チンギスハンをめぐる遺

品を護る職につくことによつて、他の賦役をいっさい免除された五百戸のダルハトと呼ばれる人々が、自称七百年あまりの間、秘儀として伝えてきた儀礼内容を、初めて公開したものである。(ただし、その一部の唱文はモスタール神父やリンチェンによつて伝えられていた。)そこには、祭典の式次第および祭典において唱えられる祝詞などの大部分、さらにダルハトの職種構成などが明らかにされている。この著作もまた、ここで紹介する本著に似て、聞き取り調査をもとにしており、モンゴルの文化史・宗教史をひもとくうえで欠かすことのできない資料となっている。両者の関係は、とりあえず、いわばチンギスハン以前とそれ以後というかたちで区別することができよう。

モンゴル人によるモンゴル研究とりわけ文化史研究における最新の成果として、ここに本著をとりあげる。

著者については『内蒙古人名録(社会科学版)』(漢文)および『オールドス人名録』(蒙文)によつて知ることができる。それらによれば、著者ホルツバートル氏は、一九五八年生まれ、オールドス地方オトク旗出身のソロンゴート一族である。現在、フフホト市にある内蒙古党校に勤務し、哲学雑誌の編集にあたる一方で、モンゴル哲学史、思想史の研究に従事している。若くしてすでにいくつかの論文をものしているが、本著と直接関係するものとしては次のような二つの論文が挙げられる。

「ハタギン族十三家神の四季祭祀」『内蒙古社会科学(蒙文版)』一九八五年四号、一一九—一二六頁

「ハーン家のジュゲリ祭について」『内蒙古社会科学(蒙文版)』一九八六年二号、一二五—一二三頁

前者は、本著の第三章に、後者は第一章第一節に対応しており、いずれも本著に先だつて書かれた簡潔なものであるため、本著を讀みすすめるうえでの良い手引きとなる。

さらに、ウラジミルツォフ以来、もっぱら社会形態論ないしその発展論として論じられてきた円陣(クリエン)について、「古代モンゴルの円陣に関する予察」(『内蒙古社会科学(蒙文版)』一九八七年四号、四一—五一頁)がある。そこでは、形態や構造ではなく、その機能的側面が整理されている点が特筆されよう。本著では後述するように、十三という天ないし神の数の起源を論じる際に、この円陣の問題が思想的側面から言及されることになる。

またさらに、有名な詩人でありかつ歴史家であるケシクバト(一八五八—一九一七)に関するいくつかの紹介や編集などに、本著の著者がかかわっている理由は、この詩人がハタギン一族であることと多分に関係している。

さて、本著についてはすでに『蒙古学—資料と情報—』一九八七年二号の六八頁に「モンゴルのシャマニズム研究における好書」として、ごく簡単に概略が紹介されている。そこで、ここでは本著の目次にしたがつて、詳しく内容を紹介し、文献解題としたい。なお、解題するにあたっては、直接、著者との議論を経て、やや不明瞭な記載内容を補足した。

本著は、三つの章から構成されている。「モンゴルシャマニズムにおける天の祭祀」と題された第一章は、「ハタギン一族の十三家神祭祀の起源」という副題が示すように、この祭祀を歴史的に位置づける作業が試みられる。それは同時に、この祭祀をモンゴルのシャマニズムにおける「テングリ神の祭祀」とみなす見解

の提示ともなっている。言い換えれば、第一章において、本書をみずからシャマニズム研究の一環として位置づけたうえで、つづく第二章、第三章で祖先祭祀の儀礼内容を具体的に叙述するという構成がとられている。

第一章第一節「ハーン家の祭祀としてのジュゲリ儀礼」では、ハタギン一族に伝えられてきた十三家神祭祀について、いわばその原始形態が推測されている、と言える。そこではまず『元朝秘史』に記された祭天儀礼（主格黎（ジュゲリ））に関するこれまでの解釈を紹介したうえで、それがボルジギン一族の祖先神をまつる儀礼であることが確認される。さらに『秘史』をはじめとし、『黄冊』の記述などから、この儀礼において父系の血統が厳守されることを著者は指摘する。つまり、この儀礼の場は系譜の暗唱を通じて血統を確認する場である、という指摘である。卑近な言い方をすれば、系譜をそらんじていない者は一族とみなされないのである。モンゴル族が文字をもつに至る以前から、その出自を明確に記憶しえたのは、こうした儀礼の場において常にその系譜を再確認してきたためであるという。『集史』において、ランドが「モンゴル族は、どの民族にもまして、その出自を正確に記憶している」と記しているが、こうした賞賛を可能にしたのは、この儀礼にこそ鍵があるのだ、とされる。

また、主格黎（ジュゲリ）という祭祀の具体的方法については、木に「肉」をかけて天をまつると記された『秘史』の説明書きを今一步深めて、「ジュルト」（『秘史』では「只勒都」などと記されたもの）を木にかかげるものと規定する。もちろん、このジュルトについても、従来の見解を検討したうえで、家畜ないし

動物の内臓（頭・顎・舌から順に気管支・心臓・肺臓・肝臓・胆嚢までが切れずにつながったもの）という原義が確認されている。「肉」という曖昧な記述は、ハタギン一族の実例を有力な証拠として、この特殊な内臓に置き換えられるのである。

こうして、肉でない部分、しかしながら魂の存在するところとして最も重視される部分を木にかけて天に捧げ、肉の部分とともに参会者一同で共食することによって、氏族を確認しあうという。以上が、主格黎（ジュゲリ）祭天すなわちハーン家の祖先神祭祀の具体的機能および方法として明らかにされている。さらにこれが、ハタギン一族に継承されてきた、十三家神祭祀の原始的姿であると推測されているわけである。

ハタギン一族が祭祀の対象としているのは、十三アタガテングリである。このため、十三という数字とアタガという名について、それぞれ節を別にもうけて著者の見解が述べられていく。

まず、第一章第二節「十三という数について」では、原始共同体から社会階層が発生するにもなつて、唯一最高神であるところの「蒼天」から多くの神々へと展開するという解釈に続いて、十三が一般にモンゴル族の尊重する数であることが、ゲセル物語などを引用して述べられる。平面上の八方向と、北に二つを加え、さらに天、地、地下の三つを加えた十三であるとされる説を著者は有力視しているが、北にのみ二つ加わる理由については不明としている。むしろここで特筆されるべきは、副題に「円陣思想の萌芽」と記されている点であろう。すなわち、著者は十三という数字を円形と関連づけているのである。

円陣思想の背後には、上述したような八方向プラス北二つの一

○ではぼ円形となり、さらに三つが加わった、いわば球形に配置された十三の神々によって護られるという世界観がある、と著者はみている。球形の基礎となる円形ないし円陣は、共同体の団結を象徴する形態であると同時に、排他性をも表現するものであろう。モンゴル族のあいだでは、十三という数のほかにも三、五、七、九などの数が重視されている。にもかかわらず、祖先神崇拜において、十三という数こそが選択されているのはなぜであろうか。著者は、十三という数を円形にみだてており、これをさらに円陣思想の背後にある世界観と関連づけて、排他的集団の凝集力の象徴とし捉えているわけである。

つづく第三節「シャマニズムの九九天」は、九九存在するとされているモンゴルの神々のなかに、アタガ天を位置づける試みである。テングリの語源についても言及されているが、ほとんどの紙面は、様々なテングリの名称の列記にあてられている。多様な文学的テキストに登場するテングリに関しての、一種の名称目録を呈している。コンテキストを抜きにして名称を拾いあげることは、それほど生産的な作業とは思われない。

ブリヤート族のあいだでは、善を代表する西の五天と、悪をつかさどる東の四四天が拮抗すると考えられている。アタガテングリは、このうち東の四四天の最高位とされてきた。悪に分類されるアタガテングリを家神として崇める点については、自然の脅威にさらされてきた古代モンゴル人の、自然界に対する畏敬の念の表れであるとして安易に理解されている。こうして、とりあえず、九九天の中にアタガテングリを位置づけておくことによって、著者は、アタガ天をまつるというこの祖先神崇拜をシャマニズム

の一環として捉えることについての了解を得ようとしているように思われる。

第一章第四節「オールドス・ハタギン一族のアタガテングリ祭祀」では、ハタギン氏族の歴史が言及される。ハタギン氏族がオールドスへ南下してきたこと、およびアタガテングリ祭祀を受け継ぐに至った経緯について、口頭伝承が紹介されている。

当初チンギスハンに対抗していた頃の住地、すなわちハルハ河流域から、やがてオールドスへ南下してきたことと関連して次のようなエピソードがあるという。アルタイ・ハンガイ山脈地方から来た人々なので、故郷を懐かしみ、いつでも故郷に帰れるようにと準備する、馬からはずした鞍を、必ず北西に向けるのはそのためである、と。この南下を著者は、チンギスハン時代に想定している。

一方、本来ボルジギン氏族の祖先神祭祀を受け継いだという点については、次のようなエピソードを掲げる。チンギスハンの護衛隊で功をたてたバヤンハラなる人物が、五百戸長の任官を不服とし、黄金一族に加えられることを申し出たが、許されなかったため、アタガテングリに誓いをたてて、これをみずからの守護神として、以後代々これをまつるようになった、と。このバヤンハラなる人物については、一九世紀後半の有名な詩人ケシクバトの孫サイシャルトが一九六〇年代に書き残した「ハタギン族の系譜」によれば、サイシャルトからせいぜい九代前にしか遡らない。著者は、この系譜が新しく書き写される際に、サイシャルトの八代前にあたるロブサンとバヤンハラの間に記載もれがあったことを指摘して、バヤンハラを元朝末まで遡ると推測している。チンギ

スハンをまつる原型が整えられたとされるフビライハン時代から、さらに充分下の時代が想定されているわけである。

著者は、本来ボルジギン一族の祖先神祭祀であったものが、チンギスハンの死後、チンギスハンそのものを神格化する崇拜が始まるために、傍系であるハタギン一族にその管轄が移行したものと推測している。チンギスハン陵での祭典においてオルドスの各旗が、なんらかの参加、負担を義務づけられていたにもかかわらず、ハタギン一族はかかわらない、といわれている点で、確かに、チンギスハン祭典とハタギン一族の祖先神祭祀とは排他的関係にあると想像される。しかしながら、上記のような口承だけからでは、著者の推測は根拠に乏しいといわざるをえない。チンギスハンをめぐる遺品を納めたオルドスおよびそれを護るダルハトたちは、移動を繰り返し、最終的に現在の地、すなわちオルドスまで南下して固定したのは、早くとも一五世紀半ばのこととされている。本書で述べられているようなハタギン一族の歴史は、オルドス全体の歴史とも関連づけて再検討を要する。史料による裏付けがまたれるところである。

以上のように、第一章では、チンギスハン一族をめぐる祖先神祭祀について一応のコンセンサスがとりつけられたといえよう。ここまでで、紙面上、ちょうど半分に相当する。本書の後半部こそが、現地での聞き取り調査をもとに明らかにされた、アタガテングリ祭祀の内容である。まず、第二章「ハタギン族の十三家神祭祀をめぐる一般的状況」に、およそ半分の紙面がさかれる。残る第三章「十三家神の祭祀儀礼」は、いわばその年中行事を記録したものである。第二章は、第三章の理解を促すために、あらか

じめ基本的な情報を与えてくれる。たとえば儀礼にまつわる特殊用具、用語の解説も含まれる。聞き取り調査でどれほどの情報が得られたか、また不幸な十年間の混乱のためにどれほどの文献や文物が失われてしまったかについても、第二章でおおよそ見当がつく。

第二章第一節では「十三家神祭祀の場所」が、北からオルドスへ南下したあと、さらにその後三転してから、現在のウーシン旗ジャラク・ソムのボルホドーへと移動したことが、古老の伝承によって知られる。

第二章第二節における「ハタギン十三家神の二大戒律」とは、*「秘密を絶対に敵守すること」「すなわち秘密として継承すること」「および儀礼に際して関与するすべての者と物を清めること」*を指している。前者の戒めについては、『秘密の書』と呼ばれるものが存在していた。ハタギン一族の中の、儀礼をつかさどる者でさえ、通常見ることが許されなかったこの書にいったい何が書かれていたかは、もはや永遠の謎である。というのも、一九六六年に難を避けた際、雨に打たれ、虫に食われて失われたからである。一説には、砂中に埋めて行方不明になったともいう。後者の戒めは、火で清めたいえで、清めのための供詞が唱えられることを指す。その唱文は、著者による録音記録を、他の三つの文献と照合したうえで記載されている。第三章にも、清めを目的とする異なる三つの唱文が掲げられているが、これらとの関係は第三章で記されることになる。

第二章第三節「アタガテングリの宮殿」には、いわば神殿ともいえる建築物について、その地形的環境と構造、外装、内装など

が、儀礼内容と関連づけて説明されている。神殿はチョムチョクと呼ばれる。この語は、本来ハナ(折り畳み式の木製格子壁)がないものを指すという。ちなみに、マイダル著の『モンゴル・ゲル』では、現在でも北方狩猟民にみられる掘立て式のテントを指しており、この儀礼の起源の古さをうかがわせる。

塩沢地の中の小高いところに、その神殿は南面する。約一キロメートル余り南には灌木のはえた小高い丘が二つある。西側の丘からは、宮殿の西へと抜ける溝地が通じており、夏の大祭において、いくつもの旗が宮殿へと招き入れられる道となる。また、流鏑馬の通路でもある。流鏑馬の標的となる人形は、この溝地に沿って崖のように高くなったところに設けられる。

神殿とはいっても、一般の家屋よりも小さく、四本の柱に四枚の板をはさみ、フェルトで覆ったものである。この神殿の廻りには、五百人ほどが収容できる、高さ四メートルにも及ぶ楊柳製の囲いがあり、その囲いの南の入口のさらに南には、東西方向に一面の壁が仕切られていた。この仕切りの南東と囲いの南東に、それぞれ香をたく場所が設けられており、式次第にに応じて場所を移しつつ、清めの供詞が唱えられていく。したがって、あくまでも第三章の記載内容と照合して読まなければならない。この点については後述する。

第二章第四節「祭祀道具」では、旗、シヨル(ヤジリ)、弓矢、刀、灯明、太鼓、フェルト、机など祭祀に用いられる様々な道具が、それぞれ項目別に解説されている。ここを一読するだけでも、この祭祀には様々な宗教的要素が混在していることがわかる。たとえば、シヨルと呼ばれる、ヤジリの先をもち、柄に対して直角

の取っ手のついた、長さ約一・七メートルの棒がある。かつて狩猟ないし戦争に用いた武器だと伝えられているが、内モンゴル東北のコルチン地方では、シャマンが招福の矢として用いている事例もある。また、これで人を突くことによって氏族の確認をおこなう事例もあるという。これに対して「祖先神の八つの武器」といわれるものは、蓮の花を形どった銀製の器を木製の台に載せたものであり、仏教的色彩が感じられる。

第二章第五節では「家神の偶像」について述べられている。もともと偶像など無かったという伝承の時代から、一八六六年の「白帽派回教徒の乱」で失われたという絹糸製の人形神像までの時代のあいだは、マルコポーロやルブルクの旅行記で補わざるをえないようである。その後、北京で製作された布製の御神体とは、黒馬に横乗りした主神と、それらをとりにまく十二の神々が描かれたものだったという。第四節で記された用具のほとんどがそうであるように、これもまた一九六六年に失われた。そして、これらの喪失と同時に、この儀礼はもはや継続実行不能となったのである。第三章に述べられる年中行事の概要は、本書に先立って書かれた論文(前掲)「ハタギン十三家神の四季祭祀」ですでに知られている。両者のあいだの基本的な違いは、本書では祭祀のそれぞれの場面で唱えられる供詞が付記されている点である。

そのほかにも若干の違いがみられる。まず第一に、当初、夏の祭りとして捉えられていた、馬乳酒を献じる儀礼が、本書では春のそれとして変更されていること。第二に、一年を通して最大の祭祀について、各儀礼行為の記述順序が異なること。第三に、天を呼ぶという行為に関する記載が加えられていること。以上の三

点である。このうち、第一の点は、内モンゴルのなかでもオールドス地方だけに伝わる古い曆の解釈とも関係する問題となる。ある程度一定しているはずの牧畜作業曆とかかわっているにもかかわらず、牧畜作業曆もまた歴史的に変遷しているらしく、儀礼のもつ季節性あるいは儀礼の季節的配列を捉えることが難しいことを反映している。また、第二の点は、各儀礼行為のなかには別個におこなわれるものもあり、必ずしもそのすべてを一連の式次第として捉えたい、ということががわれる。このことは、チンギスハン祭典においても同様である。言い換えれば、こうした祭祀には、宗教的諸相が錯綜しているのである。第三の点は、それが毎年定期的におこなわれるものではないために、先の論文では言及されなかったものと思われる。また他の儀礼行為よりもずっと以前から途絶えており、情報不足であったようでもある。

第三章第一節「日常的供養」には、まず季節を問わずに実施される儀礼的行為が述べられている。神殿のそばには、儀礼を主管する一人ないし二人の専門家が住んでいる。かれらはゾムと呼ばれる。祈りを捧げ、香をたき、福を請う際にそれぞれ唱える様々な供詞を代々語り継いできた、いわば聖職者である。日常的供養とは、この聖職者に限らず、ハタギン一族の各家々で、香をたき、ホラ貝をふき、可能な限り供詞を唱えるものである。とくに太陰曆の一日、八日、一五日すなわち新月、半月、満月の夜には、灯明がともされる。また、ハタギン一族のあいだで家畜が行方不明になったり、病人がでたりすると、神殿に赴き、ゾムを通じて灯明の光による占いがおこなわれたという。

第三章第二節に記された「正月の灯明の供え」とは、旧暦元旦

の黎明とともに、各家々であるいは各人で神殿に赴いて拝み、一年の平安を祈るものである。このとき主として羊の煮ものが供えられるために、この儀礼をまた「堅い(難い)儀礼」と呼ぶ、という。どんなに遠くに住んでいる者でも、一月八日までには必ず赴かなければならないとされている。

第三章第三節に記された「春の乳の祭礼」とは、旧暦四月(オールドス曆七月)一五日に、乳製品や馬乳酒を天に献じるものである。正月の祭礼と異なり、遠くに住む場合は必ずしも神殿に赴く必要はなく、各家々で神殿の方向に少しばかり歩んで、乳などをふりそそぎ、できるだけ祈禱文句を唱えればよい。この場合、神殿の方向に赴くことを「足跡を出す」と表現する。これは、一般に、元旦の朝に吉兆とされる方向へ歩いていき、酒などを注ぐ習慣である。本著にはオールドス地方の習慣として注記されているが、他の地方でも見られたものである。

第三章第四節は「夏の(羊の)煮もの大祭」と題されている。旧暦五月(オールドス曆八月)八日に、一族全員が神殿に赴いておこなわれる。正月や春の儀礼とはちがって、ハタギン一族が一同に会する(これを「群れを集める」という)点、さらに流鏝馬、一族の旗の掲揚、家畜の神聖化など、他の季節にみられないものがある点で、まさに「大祭」となっている。この祭礼はまた「トゥル(子畜)の大祭」とも呼ばれるという。トゥルは一説にトゥヘルともいわれることがあるため、まさしく子畜を意味するかどうかさえ、実のところ不明である。仮りに子畜の意味だとして、そう呼ばれる理由について著者は、子畜を母畜から引き離し、搾乳を開始する季節の始まりに相当するからだという人々の見解を

注記している。この五月八日の夏祭りが搾乳の始まりに相当する
なら、それに先立つ四月一日の「春の乳の祭り」は、いわゆる
初乳の祭りに相当するのかもしれない。この点よりもむしろ著者
が注目しているのは、チンギスハン祭典における夏の祭礼との期
日の違いである。チンギスハン陵では、五月八日ではなく、五月
一五日に夏の祭礼がおこなわれる。そこでは、「上天」よりもむ
しろ祖先チンギスハン個人が崇拜されるようになっており、ハタ
ギン一族の祭礼は、より古い宗教形態、すなわちシャマニズムを
色濃く残しているがゆえに期日が違うのだ、と著者は主張する。

しかし、この半月ばかりのずれ以上に『ハタギン一族の祖先神祭
祀』と『チンギスハン祭典』とは、年中の最大行事がそもそも
季節を異にしている。後者では、元旦から数えて九×九の八一日
めにあたる旧暦三月（オールドス暦六月）二一日の春の祭典が、一
年のうち最大の祭礼になる。そして五月一五日の夏の祭礼は、馬
乳酒を天に献じた春の祭典を最終的に終えることを意味するもの
だ、とされている。チンギスハン以前の祭祀と以後の祭祀とは、
微妙に季節が異なるのである。両者は異なっているも当然である
としながら、本著全体の傾向としては、むしろ一致点が随時、多
々『成吉思汗祭典』から引用されている。そもそも、両者はいつ
たい、祭祀全体にわたって具体的にどのようになら一致し、また異な
っているのか、今後の比較研究が求められよう。

さて、大祭である「夏の祭礼」には様々な場面があって、それ
ぞれに定められた供詞が唱えられる。第三章全体を通じて、ほと
んどの紙面は、そうした供詞にさかれているほどである。残念な
がら、それらのテキストは、本著では分析されていない。わずか

に、各テキストを同名ないし同類の他のテキストと照合したこと
だけが注記されているにとどまる。そうしたテキストクリティ
クの初歩的作業も欠かせないが、今後、より詳細に分析をすす
める必要がある。ここでは、その際に有効であろうと思われる視
点を私見として以下に三点述べておく。

まず、アタガテングリ云々と題された三つの供詞の存在が注目
される。それぞれ、サン（祭詞）、ダートラガ（祈禱）、ゴイダル
（祈請）と区別されており、オーブニングの清め、旗の儀礼の前
旗の儀礼の後というように場面を変えて唱えられるものである。

旗の儀礼とは、火の色をした旗、ヤジリのついた棒（シヨル）、
などと順々に神殿のもとに運び込む儀式である。これは、式次第
としての規制がゆるやかで比較的自由に行われる流鏝馬とは違っ
て、参加者全員の見守るなかでおこなわれ、また前後を一定の供
詞ではさまれているために、祭礼全体での配置が明確化されてい
るといふ特質を備えた儀礼となっている。これらの特質から、
「旗」をめぐる儀礼は、この夏の祭礼における、中枢部分に相当
するように思われる。アタガテングリをめぐって、清めの詞、旗
の儀礼の前後に配される詞と続き、さらに、これらに最後の共食
をくわえることによって、夏の祭典を貫く一本の太い糸が浮かび
上がるのではないだろうか。

第二に注目されるのは、この祭祀を開始するにあたって、清め
を目的として供詞「サン」が三つ存在する点である。第二章に記
された「清めのサン」、「十三家神のサン」「狐のサン」の順に、そ
れぞれ壁の前、囲いの中、神殿の前と、場所を奥へとすすめるか
たちで読みあげられていく。このうち、「十三家神のサン」の先

頭には、後になってから仏教に由来する「招福ダルニ」の詞句が付加された。また最後の「狐のサン」は、最も長いものであり、モンゴルのシャマニズム研究にとつての重要な資料としてすでに簡単な紹介されたこともある。(ハイシツヒのほかに『内蒙古社会科学』一九八四年一号、一七六頁)これ自体にも仏教の影響があることはもちろん否めないものの、前者者の「清めのサン」に比べれば、明らかにより古い世界観ないし宗教的思想を反映しているものである。これらの三つのサンについて、特徴を鮮明にするために敢えて一言で形容するなら、それぞれ、仏教的、祖先神祭祀的、アニミズム的とも言うことができよう。少なくとも、仏教的色彩は、順次薄れていくのである。周知のとおり、明代のアルタンハーン以来、シャマニズムなどの仏教以外の宗教的活動は政治的に禁止された。そうした状況下で、この祭祀を維持していくためには、何らかのカモフラージュが必要であったことは想像に難くない。中身が始まるまでに、何度も異なった清めがおこなわれるこの儀礼は、いかにも秘せられた感がある。著者は、この点を清めに関する厳格な戒律があったためと考えているようであるが、仏教的色彩を加えたカモフラージュとも解釈できるのではないだろうか。さらに言うならば、仏教的な覆いに限らず、宗教的諸相の重層性や儀礼の歴史の変遷などを、これら三点の清めの供詞に注目して検討することによって、読みとることができるようになる。

第三の視点は、第一の視点同様に、ナムダグ云々と称された供詞が二つあることに注目するものである。清めの後、いよいよ祭祀を始めるにあたって、ナムダグという祭詞が唱えられる。旗の

儀礼後に唱えられるアタガテングリへの諸詞のあとにもナムダグの諸詞が続く。つまり、旗の儀礼を中心に前後をささむかたちでアタガテングリへの供詞があり、これをさらにはさむようにしてナムダグの供詞が配されているのである。あたかも、旗をめぐる儀礼すなわちアタガテングリ祭祀を仏教のオペラートでくるんだような配列になっている。第二の視点で述べた推測をさらに裏付けるような、イレコ構造をとっているわけである。

以上の三つの視点を総合してテキストを読みとくことによって、大祭としてふくらんだこの祭祀を、宗教的諸相の成分に分解することができのではないだろうか。少なくとも、この祭祀を分析するにあたって、以上のように、多様な供詞テキストの配列に注目することは有益であるに違いない。

第三章第五節に記された「秋の(羊の)煮ものの祭礼」とは旧暦九月(オールドス暦一二月)八日に、祖先に対して羊煮を供えるものである。これもまた一族が会し、共食するものであるらしい。第三章第六節に記された「ハタギン一族の鎮天儀礼」とは、雷の被害が多いときに、天を呼ぶというものである。『成吉思汗祭典』にも、意図的に雷を呼ぶことよって自然災害としての雷を遠ざけるというこの習慣が、仏教的色彩を含まない伝統として特筆されている。ハタギン一族もまた、アタガテングリをまつる一環として、この伝統を伝えてきたが、毎年定期的におこなわれるものではないこと、この儀礼に関する教義書が失われたこと、長年の気象条件の変化で雷害が少なくなったことなどの理由から、もはや古老でさえも経験していなかったという。著者の聞き取り調査によって、天を呼ぶ特別の家系の者が乳児をつまんで泣かせ

る習慣もあつたこと、雷害が多いとアタガテングリの怒りを鎮めるために、何人かが奇怪な格好をして草原を馬に乗って走り回り、天を呼び叫んだことなどが知られる。いわゆる雷神としてのアタガテングリの性格をよく示す儀礼的行為が、最後に付記されて本著は終るのである。

さて本著は、その「まえがき」の最後で、「ハタギン一族が伝えてきたハーン家の祖先神崇拜」を研究する意義、すなわち本著の意義を、次の三点に絞っている。まず第一に、「モンゴル族がどの民族にもまして出自をよく記憶している」というラシド『集史』の記述に関して、ではいったい、どのような方法で具体化されてきたかという記憶方法の秘密が理解できること。第二に、チンギスハン以前に遡るモンゴル族の一つであるハタギン氏族、とりわけオルドスのハタギン一族の文化史について具体的な資料が提示されること。第三に、モンゴルのシャマニズム、文学、思想等の歴史を研究する際の、重要な一次資料が提供されること。以上の三点である。

このうち、第一の点については、第一章第一節の紹介でふれた。ただ惜しむらくは、ハタギン一族の儀礼のなかでどのように実践されているか、本著では言及されていない。著者が『元朝秘史』にある「主格黎(ジュゲリ)ノ祭天について、かなり具体的なイメージを与えることに成功している最大の理由は、言うまでもなく、ハタギン一族の儀礼を経験的に理解していることにある。しかし、読者がこれを追体験するのは難しくなっている。たとえば、ジュルトという特殊な内臓が、ハタギン一族の儀礼においてどのように登場してくるのか、第三章では明記されていない。第一章第一

節で強調されているのは、ジュルトの語義にとどまり、これを参会者一同に配分して共食していた事實は、本著に記載されていない。記載不十分ところが惜しまれる。また、史料から再構成される祖先神祭祀の「過去形」と、聞き取りなどから再構成される数十年前の「現在形」とのあいだの変遷過程については、今後の課題として残されている。

第二の意義について述べると、たしかにハタギン一族の歴史をひもとくうえでの資料提供になっている点は評価されるものの、部族史を研究目的に据えるならば、さらに多くの史料を用いて裏付けられる必要がある。むしろ、本著の意義は、オルドスのなかでもハタギン一族が特殊な存在であることを明らかにしたことにある。なんらかの歴史的経緯が隠されているに違いないので、今後の歴史学的研究が望まれる。

第三の意義こそは、本著の主眼であつたと思われる。前述の『蒙古学』の紹介文には、「従来のシャマニズム研究が、シャマンの踊りや語りに焦点をあててきたのに対して、シャマニズムが崇拜の対象とする「テングリ(天)」そのものの研究へと視点をうつしていることが、本著のユニークなところである」と評価されている。しかしながら、ハタギン一族の祖先神祭祀にシャマニズムの要素がみられるからといって、この儀礼をただちにシャマニズムとしてのみ捉えることに、そもそも問題があろう。シャマンの不在すら不問のままに、仏教以前の宗教的事象をすべてシャマニズムとして一括してしまう態度は、学問的とはいえない。様々な宗教的側面が錯綜するこの儀礼を、分解してとらえていくことが、今後の大きな課題となるはずである。

砂漠のなかのオアシスに、その舞台は据えられた。壁のないテントと称される神殿が大道具なら、旗、刀、弓矢などの様々な小道具も用意される。儀礼にはシナリオがあり、祝詞のようなセリフもある。この儀礼によって、歴史的に繰り返し演じられてきたドラマとは、いったい何なのであろうか。本著の登場によって、

こうした問いかけが可能どころまで到達することができたことこそ、本著の最大の意義であり、今後の出発点であるといえよう。

(内蒙古文化出版局(ハイラル)一九八七年)

(国立民族学博物館・第一研究部・助手)